

SGH 通信

高知県立高知西高等学校

〒780-8052 高知県高知市鴨部 2 丁目 5 番 70 号

TEL 088-844-1221 / FAX 088-844-4823

H29. No.6 2017.9.25

URL: <http://www.kochinet.ed.jp/nishi-h/>

グローバル探究Ⅲ（3年）の取組

第 1 1 回 「リサーチペーパー（個人論文）」作成

7月12日（水）のグローバル探究Ⅲは、リサーチペーパー（個人論文）の作成をしました。
3年生全員が、個人の進路に根差してテーマを設定して、その課題について探究をしたり、あるいは、地域創生ための対策を探究する活動を行いました。
各ホームの生徒たちの探究テーマは下記のとおりです（抜粋）。

1H (普通科理型)	人工知能とどう付き合っていくか	2H (普通科理型)	カフェインは飲むべきか否か
	過去に起こった地震から高知の地震対策		食の観点から生活習慣病を改善するには
	地球温暖化無自覚・無意識をなくすために		高知県の人口減少を解決するには
	過疎地域をなくすために		生命倫理は医療の発展にどのような影響を与えるか
	スマホ依存者をへらすために		日本の食料自給率の低下をくいとめるには
3H (普通科文型)	日本の財政赤字を解決するには	4H (普通科文型)	美容室の顧客数減少への対策
	健康な体を食生活によってつくるためには		異文化理解を深めるには
	農業衰退を食い止めるためには		いじめを減らしていくために
	日本企業が海外進出で成功するには		コーヒーが持つ力と問題点
	若者の食生活を変えるために		TPPによる国内農産物が受ける影響
5H (普通科文型)	常に対の観点から考察する為に	6H (普通科文型)	高知県が観光産業でさらなる発展を遂げるには
	高知の地域活性のために		博物館の入館者数の減少を防ぐためには
	高知県の人口増加のためにすべきこととは		待機児童と保育士問題の解決には
	小学校英語教科化は必要なのか		雇用問題の解決を目指して
	児童労働はなぜ起こるのか		不登校の児童の出現率を減らすために
7H (英語科)	外国人の移住先に高知県は適しているか	生徒たちは、これまでに学んだ探究方法を活用し、論拠を述べて、論理的に探究内容を思考し、それぞれの解決策を打ち出していました。探究方法としては、書籍やインターネットを活用したり、関係機関にインタビューしたりと、様々な活動し、リサーチペーパー（論文）にまとめていきました。	
	美容師の離職率の高さを解決するために		
	日本人の知的好奇心をどう高めるか		
	終末期医療について		
	コンビニエンスストアにおける食品ロスを減らすには		

探究を進めていく過程で、新たな「疑問」や「好奇心」が生まれ、この探究内容を、2学期以降も継続し、取り組んでいる生徒もいます。また、今回の活動で終わらせず、大学に進学して、さらに探究を深めて行きたいという気持ちになった生徒もいました。今後の生徒たちの動向が楽しみです。

- ☆ 私は、4月当初から取り組んできた論文を完成させることができ、一つの大きな達成感を感じています。1年前の論文に比べて、今回は、たくさんの文献やサイトを調べ、十分な情報を得ることができた。長い間悩み、時間をかけてつくってきたので、完成させることができ安心しました。
- ☆ 最初は題材について、あまり知識がない状態だったので、新しい発見が多かった。それをもとに疑問点が生まれ、問題点をあげることができた。自分の推測とは逆のことが海外では起こっていて、とても興味深かった。論文作成を通じて、仮説を立て、それを調査・立証するのだが、なかなか資料が見つからず苦労した。
- ☆ 一つのことを取りあげて案を提案するのに、たくさんの方面の専門的な知識を必要とすることを実感しました。知らないことは書けないし、調べたことはしっかり書けます。あやふやにせず文章を書くことはとても難しかったです。日高村に実際に行ってみるとわかる魅力もあったので、地域に直接行くことは大切だと思いました。
- ☆ 私はリサーチペーパーの作成で、数値が入ったデータの説得力を感じました。はじめは数値のあまり入っていない論文だったのですが、企業や公的機関のグラフ、アンケート結果を利用することで一気に説得力が増しました。今後も、今回のように、自分の意見や考え・構想を文章にする機会があると思うので、その際には、明確な数値を使って自分の意見を強いものにしていきたいです。
- ☆ 昨年は、グループ探究で論文を作成したのに対して、今年は一人で論文作成をしたので、とても大変でした。とくに問題提示から解決策までを考えなければならなかったのも、その解決策に行きつくまでの過程に苦労しました。すべてに根拠をつけて、その解決策に至るまでの経緯を書かなければならないので、たくさん調べることになり、また、それをまとめるのが難しかったです。この経験を今後に生かしていきたいと思いました。
- ☆ 今回、一人で論文を作成するにあたって、すべてが自分に責任があり、考えるのも自分だけで、考えがまとまらず苦労をしたけれど、達成感がすごくあって、自分の力になったと実感しました。1年の時は、3年になった時に一人で4000字もの論文を書けるようになるとは思っていなかったのも、グローバル探究の締めくくりとして良いものができたと思います。
- ☆ 自分一人で問題をあげて調べ、考えていくことがこんなにも大変だとは思っていなかった。でも、調べていけばいくほど深くまで知りたくなり、論文に書ききれないほどの情報を得ることができた。今までのグローバル探究の中でも3本の指に入るくらい自分ためになったと思う。大学生になってからも、こんな風に論文を書く機会があると思うので、この経験を生かしていきたい。
- ☆ リサーチペーパーを作成するにあたって、自分の考えをまとめることが非常に難しいと感じた。自分がまとめたいことを一つにまとめるには、いろいろな資料を集め、それを基に考察を重ね、そのうえで自分の考えを示さないといけないので大変だった。自分の考えが何を最終目標にしているのか、よくわからなくなったりしたので、明確に目的を定めていくことが大切だと思った。今回の経験を生かして、これからも自分の考えをまとめていきたい。
- ☆ リサーチペーパー作成を通して、私は3年間やってきたことは無駄ではなかったと実感しました。1年生、2年生の頃はどやどや書いてたり、伝えたりするかは分からなかったのも、誰かに教えてもらったりしないとできなかったけれど、今は、アドバイスをもらっても、やり方は自己流でできるようになっているので、成長したなと思いました。確実に私のコミュニケーション能力は上がっていると思います。これから面接や小論文に生かしていけると嬉しいです。

7 月 13 日（木）9:00～15:10 高知県立県民文化ホール（オレンジホール）にて、平成 29 年度高知西高等学校 SGH 国際シンポジウムが開催されました。午前の部は、鳴門教育大学元副学長の近森憲助特命教授から基調講演をいただき、続いて生徒研究発表（3 グループ）を行いました。午後の部は大学教授や企業の方をお招きしてシンポジウムを行い、最後に大阪大学の谷口勢津夫教授から講評をいただきました。



○基調講演 9:50～10:30

講師：鳴門教育大学元副学長 近森 憲助 特命教授

演題：「グローバル、グローカル、そしてスーパーグローバル」



要旨：

3 年生の皆さんが、昨年のグローバル探究Ⅱ（グループ探究）で執筆したりサーチペーパー（論文）の全 67 本を分析すると、地域課題について検討したもの（ローカル）38 本、地域の事例を活用した国外のある地域の課題解決などについて検討したもの（グローカル）12 本、国外のある地域の事例との比較や活用による地域課題解決などについて検討したもの（グローカル）11 本、地域を特定せず世界の課題や解決について検討したもの（グローバル）6 本に

分けることができた。グループそれぞれの興味関心に基づいて探究されていたが、グローバルといってもまず、身の回りにある課題について検討していたものが多かった。

社会課題は、ローカル、グローカル、グローバルの 3 つのレベルにわけることができ、それぞれは繋がっている。ローカルな問題にはグローカル、グローバルな問題が隠れていて関連しあっている。皆さんの探究例では、高知県のホームページ（HP）を調べて、他県の HP と比較して高知県の HP を良くして活性化しようとする取組はローカル、高知県でうまくいっている手法を使ってエチオピアの課題を解決しよう、少子化対策としてフランスの成果を使って高知県の少子化を解決しよう、といった取組はグローカルな取り組み。しかし、比較教育や国際教育でいうところの Borrowed and Adjusted（借用と状況への適合） の、適合させるという点で配慮に欠けているものがあつた。エチオピアに、高知でうまくいっている手法を、そのままエチオピアにもって行ったらよいというわけではない。エチオピアの状況をもう少ししっかりと捉えて、エチオピアに適合させるためにはどうしたらよいのかというアイデア、アプローチの姿勢が大事である。

皆さんの探究活動では、今、どういう課題があつて、その課題をどんなふうに解決していったらよいかに焦点があたっている。しかし、その課題はそれまでの経緯を必ず含んでいる。歴史がかかわっている。人類は 1 万年前くらいから狩猟採集の生活から定住生活へと変化しはじめた。場所が違えば文化が違う、人種が違う。文化的・民族的に異なる集団の形成が行われてきた。都市では、見知らぬ人々と暮らさないといけなくなったことから、社会をどうやって維持していくかという新たな課題が生まれた。その結果、社会的アイデンティティやルールの共有、その手立てとしての言語によるコミュニケーションや宗教の発達、社会の階層化などが生まれた。

私たちが生きているということは、「生きるという実践」を行っている。そこには、「自然」と人や集団などの「社会」の 2 つの要因が絡んでいる。皆さんが探究する基礎資料とした、2030 年までに解決しなければならない 17 の目標「SDGs」（国連総会 2015 年 9 月）に取り上げられている諸問題も、我々が「生きる実践」を果たしていくうえで「自然」や「社会」から制約を受けているものだ。貧困、飢餓、健康・福祉といった問題は、先ほど 3 つのレベル「ローカル」、「グローカル」、「グローバル」で述べたように、それぞれが繋がっている。グローバル探究Ⅱで探究したものは、逆に言うと、他の友人が探究していたことと自分が探究していたことを関連付けて考えることもできる。

スーパーグローバルとは、ローカル、グローカル、そしてグローバルの 3 つのレベルを、視点を移動させながら社会課題に取り組む姿勢、あるいは、社会問題へのアプローチの表現であり、一つのレベルのみで物事をみたり、判断したりしないということである。いろんな視点・レベルで一つの物事をみながら課題解決へアプローチしていくことが大切である。このような活動をぜひ取り入れてほしい。

SGH の活動はこれからも続いていくでしょう。私の提案は、時間や場所など様々な問題もあり難しいかもしれない。こういった活動をやっていただくと、新たな発見があると思う。ぜひ、チャレンジしてほしい。

○3年生研究発表（使用言語：英語）10:50～11:50

①「Sustainable Agriculture ―農業の持続可能性―」

3年普通科 発表者：小島 佑菜 西森 萌愛 川村 洸士郎 市原 遥輝 浅川 朋花 出間 真帆 谷 知美 東 大樹

農業の持続可能性は、国連の「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の目標の一つとして掲げられているグローバルな課題である。農家の経済的基盤を盤石にすることは持続可能性の重要な要素であると位置づけられている。私たちは、高知県の農業の新しい方向性について、JAと農家との間で発生した問題から、高知県の農業の実態を探り、今後の課題や対策を考えた。高知県の地域活性化に貢献できるように、小規模農家が多い本県において、農業の経済的発展を目指すための方策を提案した。



②「Why Not Fair Trade? ―フェアトレードのすすめ―」

3年英語科 発表者：伊藤 綾乃 田岡 詩織 中井 花

フェアトレードのラベルができてから約50年。「フェアトレード」という言葉が知られるようになり、フェアトレード製品を取り扱うスーパーも多くなってきている。しかし、何か良いらしい、ということは知られていても、フェアトレードは主な貿易形態として浸透していない。それはなぜか。私たちはフェアトレードの認知度がまだ低いということが最大の原因であると考えます。フェアトレードの様々な問題点も議論されているが、私たちは理念通りにフェアトレードが行われれば世界はより良い方向に変わると信じている。「生産者の自立を促し、貧困の解決の一助になる」、「これからさらに注目されるビジネスモデルになる」という2つのフェアトレードの持つ可能性について論を展開した。



③「Local and Global Deforestation ―高知と世界の森林破壊について―」

3年英語科 発表者：安養寺 珠梨 米川 菜乃華 西山 日翔

森林面積率全国第1位の高知県の林業が直面する課題とは何か？林業から地域活性化に取り組もうとすれば、いったい何ができるのか？そして、森林をキーワードに Global issue として取りあげたのが、アマゾン熱帯雨林の森林破壊。その原因は何なのか？そしてそれを食い止めるためには何が必要なのか。森林破壊はアマゾンのみならず、高知でも進行している。どちらの森林破壊をも食い止める取組やアイデアを生み出すのが、『生態系サービス』という概念である。本発表ではこの概念から派生した世界各地の取り組みを紹介し、この概念を学び、近年の高知県の取り組みが極めて先進的であったことに気づいた私たちの感動をお伝えした。



○質疑応答 11:50～12:30

研究発表後、来賓の方や会場の方々から、発表内容についての質問やアドバイスなどをいただきました。



○国際シンポジウム 13:30~14:50

テーマ：「高知県の地域創生、世界の地域課題解決」

登壇者：大阪大学大学院高等司法研究科 谷口勢津夫 教授

高知大学人文社会科学部 Darren Lingley 教授

旭食品株式会社 海外事業部長 竹内 孝三郎 氏

高知西高校 東 大樹さん (3-4H)

エイバーク 樹里亜さん (3-7H)



○高知県の地域創生について

エイバーク 樹里亜さん



私はSGHで台湾リサーチに参加した。台湾では排気ガスなどによる空気公害がひどかった。そこで、空気のきれいな高知県で非日常を体験してもらう、インバウンドによる活性化ができないかと思い、探究活動を行った。高知県への台湾人旅行客は、「遅咲きのヒマワリ」が台湾で放送されたこともあり、4年間で23倍に増えた。訪問先は、やはりテレビの舞台となった高知県西部で、東部はいない。そこで東部を研究対象にし、その中でも芸西村に焦点をあてた。ピーマン、なす、みょうがなどの特産品があり、空港から20分の立地で交通の便も良い。ツアープラン4泊5日で考えた。初日はよさこい体験、2日目はブルースターや花の見学、天文学習館訪問、3日目は「チャリンコマップ」を使ったおいしい空気を吸いながらのサイクリングや、しらぎく仙頭酒造、地引網体験などを体験するプログラムを考えた。高知県には自然を生かした良い素材がたくさんある。それらをどう生かしていくかがこれからの高知の課題だ。

Darren Lingley 教授



カナダ人から見た高知の魅力について。住みやすい。海、山、川、自然が素晴らしい。遍路はハイキング好きの外国人に知らせるべきだ。高知の魅力が知られていない。短期間の滞在でもよい所ということがわかる。特に、自然の多さは魅力的である。しかし、地域開発をすることでそれらの自然が損傷を受ける。窪川町の興津で起こった原子力発電所建設問題について、高知県民は自然を守るために建設を防ぐ運動を起こした。これは素晴らしいことである。また、土佐清水市（大岐の浜）では、太陽光発電事業（メガソーラー）の着手について、住民が自然を守る運動を行った事例がある。このように、高知県民は自然に対する問題意識が高いと思う。さらに、柑橘系フルーツの種類が年間を通して多い（ポンカン・文旦・小夏・みかんなど）。「呑む文化」もある。多くの種類の日本酒があり、これらが県内の各地域でつくられている。そして、それらが多くの道の駅で手に入れることが魅力的である。アンパンマンや坂本龍馬、ジョン万次郎といった県に貢献したキャラクターや人物もあり、多くの伝統芸能、祭りもある。例えば、絵金祭りやTシャツアート、お遍路等もある。このように、多くの魅力的なものが高知県にはある。これらの素晴らしいものを外国に、そして外国人観光客にも発信していくために、言語の障害を取り除いていく必要があるだろう。

竹内孝三郎さん



私は祖父や父から最大の地域貢献は、雇用をつくることだと教わってきた。雇用をつくり、共に働き、地元に還元できる事業を行い、利益をつくり出すことが大切と教えられてきた。そのような理念を念頭に置いて、現在、海外事業部では2つの会社を運営している。1つ目は（株）フーデム。主な仕事としては輸出と輸入。輸出は海外のマーケットを開拓してくること。海外では、ゆず果汁、日本酒、お菓子などをメイドインジャパンはニーズが高い。最近では、コンビニのフランクフルトを買うと付いてくるケチャップとマスタードで折るだけで合わさってかけることができるソースがある。それはアメリカと日本がメインで作っている。台湾にはなくて、台湾から欲しいと我々に依頼が来た。日本の企業と交渉して、台湾に輸出することが決まった。有機野菜、冷凍野菜、ワインの輸入なども行っている。2つ目は、Green Earth Power Japan (株)という会社で、主に環境事業や、自然エネルギーの創出をやっている。太陽光発電や水質浄化装置、バイオマス発電などを行っている。7年ほど前に始めた。私の持論として「食」は人を動かす原動力であるし、「エネルギー」は工場を動かす原動力である。何かを動かす原動力となるもの、これらは少なからず密接に繋がっていると考えている。海外事業部で会社をつくり、雇用を創出し、地域に貢献できるようこれからも頑張っていきたい。

谷口勢津夫 教授



私は税法が専門。出身は高知県の窪川町。高校まで高知県にいた。今は大阪に出稼ぎに来ている感覚で、いずれ高知へ帰るつもりだ。高知のあり方は常に気になっており、近年、地域創生が盛り上がっていると感じている。素晴らしいと感じているのは次の2点である。まず、2013年頃から始めた「高知家」の取組が素晴らしい。安倍内閣が地方創生を謳う以前から行っている。しかし、地方創生の考え方は手段であって目的ではない。地方創生の究極の目的は「幸福」を追求することだと思っている。現在、世界的にも幸福度が注目されている。毎年3月20日に世界幸福度ランキングが発表されるが、今年はノルウェーが1位だった。高知家の取組は家族の幸せを追求している取組だ。爺-POP from 高知家 ALL STARS が歌う「I Was Young」の歌詞では、最初、昔はスリムだったとか、過去の良かったことを歌っているが、途中から「今が一番幸せ」と歌っている。幸せには「結果としての幸せ」と、今やっていることが幸せだという「プロセスの幸せ」がある。私は「プロセスの幸せ」が大事と思っている。高知家の取組はみな幸せそうにやっている。

2つ目は大川村の村議会が存続の危機に陥っていることだ。大川村村議会の行方が高知県の地域創生の試金石ではないかと思っている。村民が直接意思表示する町村総会になるかもしれない。直接民主制の例では、窪川町興津の原発問題がある。町長リコールまでいった。町民の意思が直接反映された例で、誇りに思っている。直接民主制が強い国はスイス、視察も多い。これから地方創生を考えるうえで、高知の地域創生を考えていくなれば、議員さんに任せるのではなく、住民一人ひとりがかかわっていくことが大事ではないかと考えている。

○世界の地域加地解決

東 大樹さん (3-4H)

香港の食料自給率は1%しかない。食料のほとんどを中国に頼っている。農業も多量に使われているため、香港人は食の安心安全を求めている。実際、香港で訪問した大学の学生93人にアンケートをとったところ、全員が日本の食材は安全であると答えた。日本は法律が厳しく、安全なイメージがあると言っていた。そこで私は MADE IN KOCHI という高知のブランド化をテーマに探究活動した。高知県の食材のおいしさ、安全性などを活かした MADE IN KOCHI という名のブランドを確立し、海外へ発信できれば、地域創生の大きな一歩になると考えた。香港に5店舗を展開する iCremeria というカフェを訪問した際、そこでは仁淀川町の沢渡茶の茶葉や、夜須町のエメラルドメロンなどを使ったスイーツが人気だった。香港でも高知県の食材や安全性が受け入れられていることが証明された。国内でなく、海外へ輸出し、その土地で MADE IN KOCHI としてブランド化できれば、その国では高知県の農産物を買ってくれるようになる。しかし、ブランド化は簡単ではない。単に高級なだけではいけない。高い品質と、安全性を長い期間かけて積み重ね、浸透させていく必要がある。MADE IN KOCHI がうまくいけば、高知県の知名度も高まり、観光業にも良い影響を与えるのではないだろうか。



竹内孝三郎さん

私どもの Green Earth Power Japan (株)では、マイクロバブルを活用して酸素を増やし、微生物を活性化させて川をきれいにしていくという水質浄化装置を手掛けていている。最近の例では、この装置を中国の工場排水や畜産のし尿処理がなされず垂れ流しになっている河川に対して設置する汚染問題対策を行った。

海外進出の困難な点は、海外に出る場合、旭食品単体ではなく、パートナーを見つけてしっかり信頼関係を築いていかなければならない。私は名古屋の大学を出て、アメリカ合衆国のオレゴン州立大学に進み、オーガニックの勉強をした。海外では、そこで出会った友人たちと仕事をしている。信頼度が高い。しかし、知らない相手先だと、信用してよいかどうかわからない。与信調査（パートナーの信用調査をすること）をしっかりとやらないといけない。直接、会社を訪問し、聞き取り調査をして、見極めている。いまだに苦労するところだ。また、3年前から、旭食品のよさこい祭りの長をやっている。知事も2020年東京オリンピックで発信していきたいといっているの、祭りの面でも高知県の地域創生に貢献したいと考えている。



Darren Lingley 教授

カナダの地域課題の解決方法で高知県に適用できるものについて。背景や歴史によって状況は異なるので非常に難しいが、高知との類似点を挙げるならば、漁業・農業が盛んで、自然が多い。

そこで、自然にフォーカスを当ててみると、地域の特性を活かした創生方法が見られる。カナダにはファンディ国立公園があるように、高知も室戸のジオパークがある。このようにもっと公共の空間（パブリックスペース）となるものを作り出すことが大切だ。カナダにもセントジョン市にジオパークがあるが、室戸のものは規模が違う。室戸のジオパークは多くの科学的なものがそろっている。地理的なものや地質学的なものなど幅広く、そこでは学ぶことができる。また、遍路道を「ハイキングロード」としてPRしていくことも一つの方法であろう。

カナダのセントジョン市も実施したが、大型客船の来航地（クルーズシップターミナル）として設置することも地域創生の方法であろう。これにより世界中の外国人がこれまで以上に高知に訪れることが考えられる。その際 Wifi 環境を整えたり、高知大学の学生を通訳として（ボランティアとして）参加させることで、観光客の満足度を上げることができるだろう。

カナダとの相違点は、カナダは移民を多く受け入れている国、難民（シリア難民）を受け入れている国、バイリンガルの国（英語・フランス語）であること。高知と同様に、セントジョン市の若者も都市部への流出が激しい。しかしながら、移民が地域を活性化してくれている。今は難しいかもしれないが、近い将来、日本の体制が変われば、今の状況もカナダのように変化するかもしれない。

また、高知産品が国内外で買うことのできる流通システムができればいい。高知産の日本酒・文旦等。

谷口勢津夫 教授

留学生の受け入れが重要。海外進出では様々な困難にあたる。海外では日本と共通の理解やルールがあると日本の企業が動きやすいし、逆に海外の企業も日本に来て活動しやすい。途上国の法整備支援をやっている同僚がいる。会社法、民法などつくる指導をしている。これも社会的なインフラの一つだ。

様々な課題の根源には人口爆発がある。これほど人口が増えなければ、食糧問題や地球環境はそれほど大きな問題になっていないのではないかと。貧困の問題には、人口が増えたための貧困、人口減少による貧困がある。原因は違うのに結果として貧困という課題がある。貧困について課題解決を探究する場合、違うところと同じところをしっかりと区分けしておかないといけない。高知県の成功事例を人口爆発地域にもっていても合わない。森林の問題、アマゾンの森林破壊と高知県の森林破壊を並べて、高知県の取組は先進的な取組であったことに感動を覚えた。高知県は植林をした、アマゾンの原生林、もう一步検討を要すると感じた。日本の課題解決と世界の課題解決はダイレクトにはなかなかいかないのではないかと。

※最後の意見交換の際に、谷口教授から幸せな職場づくりについて、産業能率大学総合研究所が提唱する「Hapinnovation」という概念があることをご紹介いただきました。

○講評 大阪大学大学院高等司法研究科 谷口勢津夫 教授 14:50~15:10



私は、3年間で、高知西高校のSGH事業にかかわってきた。3年生が1年生の時から成長ぶりを見てきた。探究とは、原因が何かということをついとい掘り下げていって、課題の解決方法を導き出す、これに尽きる。PDCAサイクルではなく、アクティブ・ラーニングから出発するACLH（アクティブラーニング→クリエイティブ→ロジック→happy）のサイクルがよいのではないかと。自由に伸び伸びと考える→独創的に考える→それをロジカルに相手に伝えて自分も相手もhappyになって、コミュニケーション

が図れるようになって、そこにコミュニティが生まれる。こういった過程こそが地域創生である。学校もコミュニティである。だから、みなさんがやっていることは実は学校創生、西高創生でもある。

今日の発表は学校の中の取組に留まっている。しかし、学校もコミュニティである。皆さんがやっている「食を活かした地域創生」を行いながら、実は学校創生をやっている。西高創生をやっている。1年生の発表会も見したが、その時から比べると非常に成長している。そして楽しく幸せにやっている。今日の3つの発表は非常によかった。楽しく幸せになっていることが感じられた。一番顕著なのは先生方が変わってきた。生徒とともに新しい西高を作り上げていこうという機運がひしひしと感ぜられる。生徒の皆さんは、SGHの取組をやっているうちに、「新しい西高」を作っているんだという意識でこれからもSGHに取り組んでほしい。